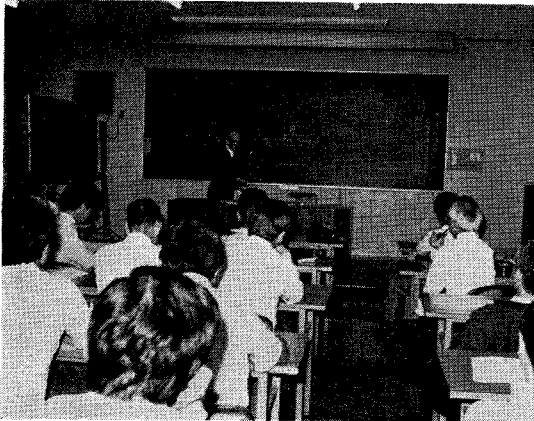


雑 報

東京天文台の第1000回談話会



(写真撮影 香西洋樹)

明治33年に天文学談話会が創始され、東京天文台で毎回7~15名が会合して研究発表や新着論文の紹介等をしていました。第44回から第447回までは天文月報に記録が残されています。戦争中はしばらく中断されていましたが、昭和21年に東京天文台談話会と名を変

えて再出発、昭和52年7月8日に第1000回を迎えました。第451回から第700回まで談話会記録という小冊子に、その後は東京天文台年次報告に記録が残っています。当日は東京大学名誉教授で元東京天文台長の広瀬秀雄氏が「談話会1000回をふりかえる」という題で、ある学問の分野が発展していく様子を歴史的に捕えるにはどういう尺度をつかえばよいかということについて講演されました。会終了後、これから益々天文学が発展することを願って皆で祝杯を上げました。(成相恭二)

赤外線天文学の研究——京大奥田グループ

奥田治之氏等5名に対して52年度朝日学術奨励金が贈られるとのが朝日新聞紙上に報道された。赤外線天文学の重要性が認められたという意味で喜ばしいことである。この機会に京大赤外グループの紹介をさせていただきたい。

日本に於ける赤外線天文学は約10年前に始まる。当時名大におられた奥田氏、杉本氏それと筆者の3人で“赤外で何ができるか”を考えたものである。当時は現在の赤外線天文学の隆盛は想像すべくもなかったが、NML Cyg, NML Tau の発見等から何か面白そうなことが始まりそうだとの予感がしたことを記憶している。その後奥田氏は京都大学に移られ赤外グループを作って

わが国唯一の天体観測雑誌

天文ガイド

定価240円(〒45円) 77-11月号・10月5日発売!

●11月号おもな内容

- ★毎年夏の恒例、「星空への招待」が今年も磐梯吾妻スカイライン浄土平で開かれました。あいにくの雨にもかかわらず多数の参加者がありました。グラビアで紹介。
- ★夏の夜の豪華版ペルセウス座流星群は、全国的に雨。それでも熊本第二高校の天文班が観測に成功。FM観測の結果も加えてペルセウス群の活動を紹介します。
- ★私の天体写真術は、木星・土星の撮影法を紹介します。
- ★天体写真全盛時代、6×9cm判天体カメラの自作機を紹介します。岡崎清美さんの作品の紹介です。
- ★秋の二重星の観測、読者の研究、メシエ探訪……ほか

天体写真 NOW NO.1

アマチュアによる天体写真の進歩はめざましいものがあります。本誌「天文ガイド」には、そのすばらしい作品が毎月紹介されております。

今回は、天体写真のうちで今、人気を集めている103aフィルムについて、その特性、使い方、作品集、体験談等で特集を組みました。これから103aを使う人にはよいヒント、アドバイスになります。

また、天体写真の仲間たちのレポート、天体写真と天文学、天体写真の先駆者のレポートなど、天体写真についての興味あふれる記事を収めています。

●天文ガイド別冊/A4変型・96ページ・900円発売中

誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町1-5
振替東京7-6294 電話03(292)1211

本格的に仕事を始められたのであるが、この間我々がモタモタしている間に世界で、特にアメリカで赤外線天文学は怖るべき勢いで発展していったのであった。この事態をなんとか切り開き、世界に追いつき、追い越そうとの精神のもとに構想されたのが、上松の 1m 赤外望遠鏡であった。(天文月報 1973 年 11 月号参照) この望遠鏡は科研費で作られたために人員、維持費とも 0 であり、このため建設、その後の保守管理、実際の観測に京都の人達が払った努力は大変なものであった。しかしその努力の結果この望遠鏡は着実に成果をあげすこぶる多産性であることを示した。「日本にも赤外線天文学あり」ということを世界に示した点に於てこの望遠鏡は日本の赤外天文の一時期を画したものとといえるであろう。

上松の仕事は多様なものであるが、奥田グループの興味の中には赤外天文の主要テーマの一つである「塵」があるように思われる。彗星、新星、赤外線星、銀河中心等の測光、偏光観測は塵の生成、光学的性質、星間空間内での分布等を知る上に大変興味深いものである。炭素星での $3\mu\text{m}$ 吸収線の発見も出発は星間塵中の水を見出すことであった。また 10 ミクロン帯での CRL 天体のサーベイとその測光、偏光観測等のその他の京大赤外グループの一連の仕事を見ると、その時々の世界の赤外天文の中心テーマをとりあげ、第 1 線の仕事をしようという意欲が強く感じられるのである。

このような地上の仕事のみならず、赤外天文に欠くべからざる上空観測にも意欲を示され、銀河の気球観測を精力的に進めておられる。

日本の赤外天文は上空の仕事を含めてやっと一人前になったかどうかというところであろう。一方世界では赤外は天文研究のための一つの手段として定着しつつあり、これまでの可視域のみによる場合と比べて情報量の飛躍的増大をもたらしている。この赤外観測の重要性はよく認識されており、大型赤外望遠鏡が続々と建設さ

れ、人工衛星、スペースシャトルによる観測計画も具体化しつつある。観測内容でいえば、分光観測が今や不可欠となりつつあること、遠赤外、サブミリの観測が重要な部分を占めつつあること等がその特長であろう。

京大赤外グループでは現在第世代の大型望遠鏡を建設することが計画されている。また、気球観測も発展させ、遠赤外での観測を計画されていると聞く。我々各大グループも主として上空観測に於て赤外天文の一端を担うべく、各種計画を考えているし、東大天文学教室では BAT II の大計画が進行中である。これらの計画が実現し、我が国の赤外線天文学の水準を世界に誇ることができる日が一日でも早くくることを願ってやまない。

(名大理・松本敏雄)

掲 示 板

国際機関の専門家の募集について

外務省国連局の国際人事センターより国連等の国際機関の事務局・フィールド専門家の空席公告(契約は約 2 年)が学会宛に来ています。気象関係・コンピューター関係等の専門家の募集も 2~3 あるようです。多くは 10 年以上の専門的経験があって 35 才以上の人を対象とし、応募の締切も 9 月中がほとんどのようですが、詳しい情報入手されたい方は

国際機関人事センター

〒100 千代田区霞ヶ関 2-21-1

電話 03-580-3311 (内線 2840)

にご照会下さい。

☆ ☆ ☆

1977 年 7 月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	—, —	6	—, —	11	1, 3	16	0, 0	21	2, 5	26	5, 25
2	2, 40	7	3, 18	12	1, 8	17	0, 0	22	2, 6	27	6, 17
3	3, 25	8	2, 18	13	1, 10	18	0, 0	23	6, 14	28	3, 12
4	3, 31	9	2, 10	14	1, 4	19	0, 0	24	3, 13	29	4, 13
5	4, 21	10	2, 5	15	0, 0	20	—, —	25	2, 11	30	3, 6
										31	1, 1

(相対数月平均値: 24.1)

昭和 52 年 9 月 20 日

印刷発行

定価 300 円

発行人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内

印刷所 〒112 東京都文京区水道 2-7-5

発行所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内

電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359

社団法人 日本天文学会

啓文堂 松本印刷

社団法人 日本天文学会

振替口座 東京 6-13592